

重要文化財 一字蓮台法華經 二巻

如来神力品第二十一

紙本墨書

縦二十八・八糎 横一〇二・〇糎

界高二十三・九糎 界幅二・〇糎

囑累品第二十二

紙本墨書

縦二十八・八糎 横六十六・二糎

界高二十三・九糎 界幅二・〇糎

京都国立博物館蔵

日本の古写経の中で、『法華経』八巻二十八品ほど夥しく書写され、種々に装飾されたものはない。『法華経』法師品には「是諸経之王」と説くが、古写経に於ても『法華経』は「諸経之王」たるにふさわしい。

この『法華経』がいつわが国に齎されたかは明らかではない。しかし早くに聖徳太子（五七四―六二二）が『法華義疏』を著していることから、かなり早い時代に伝来していたことが窺えよう。奈良時代には、聖武天皇（七〇一―七五六）が天平十三年（七四二）に勅を出し、諸国に僧寺（国分寺）と尼寺（国分尼寺）を創建せしめることになった。『金光明四天王護国之神』と名づけられた僧寺には紫紙金字『金光明最勝王経』が、「法華滅罪之寺」と名づけられた尼寺には紫紙金字『妙

法蓮華経』が奉安されたのである。

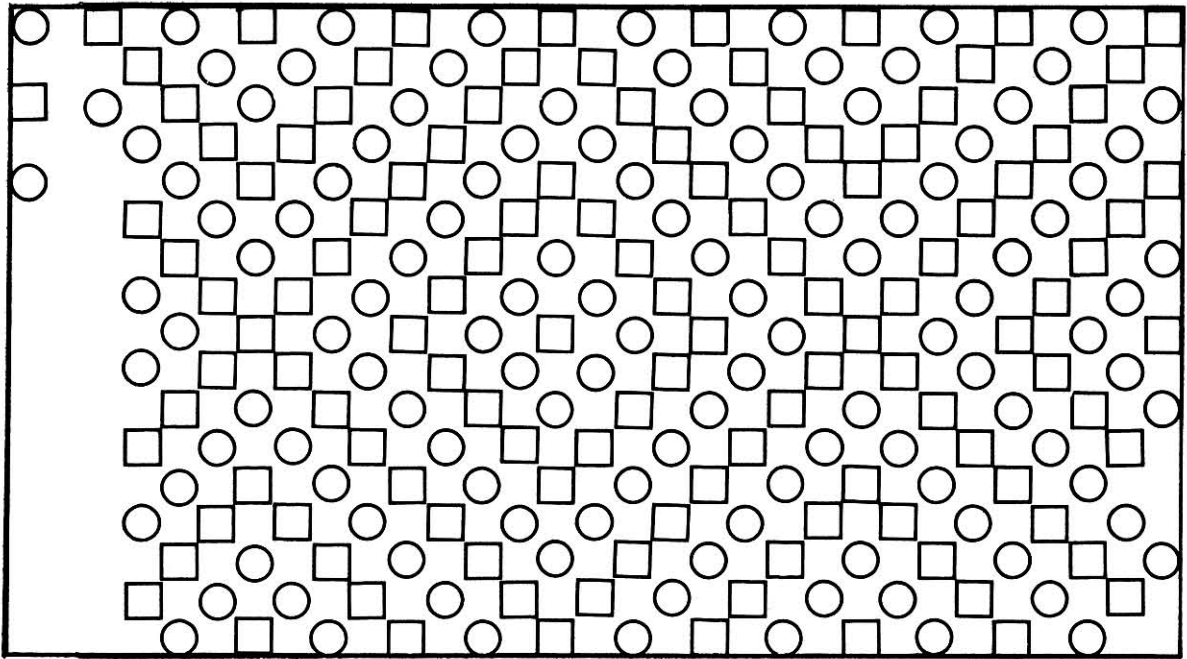
このような『法華経』に対する信奉は、最澄（七六七―八二二）の出世によって一層拍車がかかることになる。最澄は延暦十七年（七九八）十一月に比叡山で法華十講を始め、同二十一年には和氣氏が開催した高雄神護寺の法華経講会（高雄天台会）に講師の一人として招かれている。そして延暦二十三年に入唐、天台の地に詣でて帰朝し、比叡山に於て『法華経』を正依の經典とする日本天台宗を開くのである。その後、円仁・円珍が出て天台の法流を盛んにした。特に円仁（七九四―八六四）は如法経の始修者とされる。

また十一世紀半ばには末法の世に入るとされ、これらの仏教の情勢に呼応しつつ、法華信仰が貴族社会に浸透していったと思われる。もちろん『法華経』の教説自身もつ魅力、つまり譬喩が多く説話性に富んでいること、女人成仏を説くこと、經典護持の功德を説くこと、現世利益を説くことなどが重要な要因になったことも見逃せない。

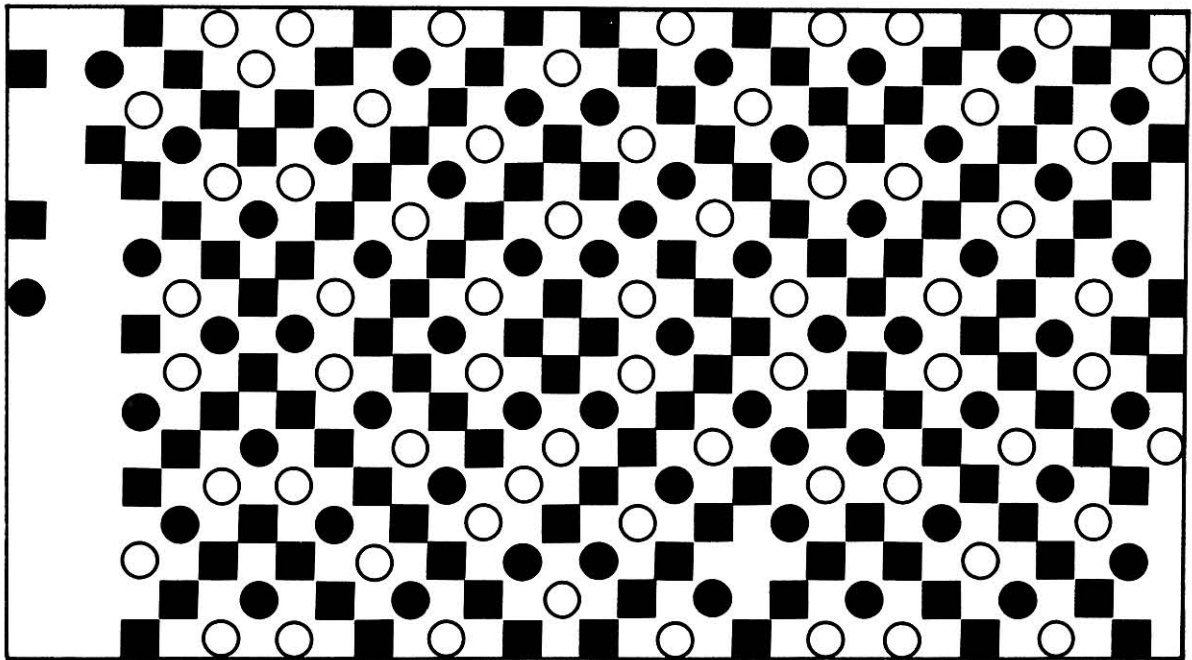
『法華経』は、六万九千三百八十四文字より成り立っているといわれる。その一字、一字を一仏に見立て、それぞれを蓮台に載せて書写した経巻がある。「一字蓮台経」と呼ばれるものがそれで、本館には法華二十八品のうち「如来神力品第二十一」と「囑累品第二十二」との二品（いずれも八巻本では巻七所収）を守屋コレクション中に所蔵している。

如来神力品第二十一

斐紙に銀泥で界を引き、淡墨で蓮弁を描いて彩色を施した後、一行十七字詰に経文を書写している。蓮弁は、各行の初めより群青、



□ 丹 ○ 緑青



■ 群青 ○ 金泥 ● 銀泥

(挿図2) 囑累品蓮弁の配色

と金泥・銀泥と思われるもので彩色している（挿図2）。

このように蓮弁は実に丹念に彩色され、和様の能筆で書写された経文一字一字を際立たせている。経文は首尾完存している。紙背に花押がある（挿図3）。

一字を一仏に見立てて書写した『法華経』のうち、代表的な遺品と考えられるのは一字宝塔の形式をとった経巻である。

重文 一字宝塔法華經（入道心西願經） 個人蔵

重文 一字宝塔法華經 栃木・輪王寺

重文 一字宝塔法華經・觀普賢經 京都・本満寺

重文（一字宝塔）法華經 長野・戸隠神社

これらはいずれも宝塔の中に経文の一字一字を書写したものであり、「見宝塔品」にある多宝仏の塔の教説を承けたものといえよう。しかし「法師品」にも

若経卷所住処皆应起七宝塔極令高広嚴飾。不須復安舍利。所以者何。此中已有如来全身。

とあり、経巻が安置される処に七宝の塔を造るべきであると説いている。仏舍利がなくとも、塔内に「如来の全身」があるという。「如来の全身」とは経巻を意味し、その経巻を形作るものは経文の一字一句であろう。宝塔の中に経文の一字一字を書写し、奉安するということは、このような心ばえの表現といえよう。一字宝塔の形式は経文の一字一字をその中心に据え、「仏語」としての文字一字一字を莊嚴しようとするものである。

一方、経文一字一字に対する信仰よりも経文を書写する料紙そのものの莊嚴、いわゆる料紙裝飾を中心にして経文を飾ることも行な

われる。一般に「裝飾経」と呼ばれるものの大半は、このような形式のものである。その代表的な遺品が「久能寺経」であり、「平家納経」である。もちろん、これらは莊嚴の限りを尽くし経巻を飾ることによって篤信のほどを現わそうとしたのであろうが、料紙裝飾に力を入れるあまり、写経の領域を越えてしまったようである。

一字即仏の思想を反映させた「一字宝塔法華經」と料紙裝飾を中心にした「裝飾法華經」のいずれもが平安時代後期（十二世紀）の作と見られ、今の館蔵『一字蓮台法華經』は宝塔と蓮台の違いはあれ、前者の系統にあることは言うまでもない。また大和文華館所蔵の国宝『一字蓮台法華經』は、このような両者の技法を取り入れた遺品であろう。

更に経文と仏を一行ごと交互に配したものに善通寺所蔵の国宝『一字一仏法華經序品』がある。

写経の本来の意義は、仏陀の教法の伝持、教法の流通にあるといえよう。特に印刷術の発達しなかつた時代には、経文を書写するという行為は重要な意義をもっていた。それ故に写経の功德は高く宣揚せられ、諸経典の中にその功德を讃えていることが多い。『法華經』も例外ではない。

経典が仏陀の教えを伝える仏教聖典である以上、その経文は正しく誤りのないものでなければならぬ。わが国では、奈良時代の写経がその責務を負うた。しかし、ほとんどの経典が完備され、中国より版本の大蔵経が齎されたりした平安時代中期以降になるとテキストとしての仏典という意味合いが薄らいでくる。そして末法の世という時代の当来とともに、写経をはじめとした作善が盛んとなる。

これらと王朝貴族の耽美趣味が一体化した時、目の醒めるような裝飾経が生み出されていく。その中心となる経典が『法華経』である。

このような中で館蔵の『一字蓮台法華経』は、経文の一字一字を如来の分身と捉え、文字を「仏語」そのものとして真摯に受け留めた作品として位置づけられよう。前に名を挙げた『一字宝塔法華経』のいずれもが宝塔を描いたということもあるが、一行十七字詰という写経の伝統に則っていない。本作品が一行十七字詰という写経の伝統に則った意味もそこにあるといえよう。

「神力品」「囑累品」と書き手は違っても端整に書写された経文と経文本位に描かれた蓮弁、この両者が相まって敬虔な美しさをかもし出している。中でも犯すべからざる経文の荘嚴、それを強く意識しているのが「囑累品」ではなからうか。

最後に本作品が龍興寺所蔵の国宝『一字蓮台法華経』より離れたことをつけ加えておく。

(赤尾栄慶)

〈注〉

- 1 鳩摩羅什によって訳された『法華経』の当初の形態は七巻本で、菓草喻品の後半、五百弟子受記品と法師品の初め、提婆達多品、普門品の偈を欠くものであった。野村耀昌「中国文化と法華鑽仰史の連関―敦煌壁画及び敦煌文書を中心として―」（『法華経の思想と文化』所収）の「妙法蓮華経調卷の問題」の項を参照。
- 2 大正大蔵経第九卷三十二頁上。
- 3 『叡山大師伝』（日本大蔵経天台宗顕教章疏二、二五一頁〜三頁参照）。
- 4 大正大蔵経第九卷三十一頁中。